

ヨハン・ガルトゥング氏はノルウェー人で、数々の国際紛争の調停に関わり、平和学の世界的権威者である。ガルトゥング氏は度々来日し、日本の状況を熟知し、直面している外交的な諸問題に対し、緊急提言として『日本人のための平和学』を著している。諸提言は興味深く、考えさせられる。多くの日本人に読んでもらいたいと思った。

安倍晋三首相は、武力による米国追従政策を「積極的平和主義」と言い、推進しようとしている。この件に関し、ガルトゥング氏は下記のように書いている。「『積極的平和』というのは、私が1958年から使い始めた用語である。平和には『消極的平和』と『積極的平和』がある。国家や民族のあいだに、ただ暴力や戦争がないだけの状態を消極的平和、信頼と協調の関係がある状態を積極的平和という。消極的平和を積極的平和と言い換えるだけならたんなる無知だが、こうあからさまな対米追従の姿勢を積極的平和とうのは悪意ある言い換え、許しがたい印象操作である。」安倍首相は恥じたのであろうか、最近「積極的平和」とは言わず、「集団的自衛権」という言葉を使っているようである。

沖縄の米軍基地問題に関しては、日本から撤去させればよいと明確に提言している。日本に米軍基地などなくても、安全を確保できる。むしろ、ないほうが、創造的な平和政策を遂行しやすくなる。東北アジア共同体を構築し、アジア諸国の調和と安定に貢献できる道が開けてくるからである。沖縄県民の犠牲もなくなり、沖縄を東アジアの「平和の島」と位置づけることができる。平和は直近の問題に右往左往されるのではなく、長い歴史の展望をもって、作り上げていくものである。

自衛隊の憲法違反問題が議論されている。憲法9条の2項は「陸海空その他の戦力は、これを持たない。国の交戦権は、これを認めない」と謳っている。まともに読めば、自衛隊のための戦力も持たないことになっている。ガルトゥング氏は、丸腰で国を守れるなら、それに越したことはないが、他国を攻撃する戦争は常に起こり、外交努力だけでなく、武力による専守防衛のための、必要最小限度の武器の保有は必要であると語る。ただし、長距離兵器から短距離兵器への転換を訴えている。日本に適した国境防衛(沿岸の専守防衛)、領土内防衛(自衛隊による防衛)、非軍事的防衛(市民による非暴力的不服従抵抗)の3つを組み合わせた防衛を追求すべきだと提案している。「九条の会」の中でも、自衛隊の存否に関する議論がある。憲法13条は、国民の生命、自由、幸福追求権を尊重すると謳っている。個別的自衛権を認めている訳で、自衛隊を合憲とする根拠になっている。ただし、他国軍と共同して戦争することは認めていないことは確かである。

ガルトゥング氏は、「歴史認識と和解」の問題について書いている。韓国との関係では「慰安婦」問題、中国との関係では「南京虐殺事件」が、歴史認識で大きな差異がある。日本人の中には、これらの問題はなかったと言う人々がいる。韓国、中国では、これらの問題を強調し、政権浮揚に利用する傾向がある。互いに不幸である。ガルトゥング氏はまず、史実を検証する作業から始め、虚偽ではなく、事実を知ることが重要であると言う。政府機関から独立した、国連に認証された第三者で構成される委員会、歴史的検証を深め、合意を形成する。そこから、未来の建設に取り組む。しかし、合意を得ることは至難の業であろう。不毛な議論で終わり兼ねない。ガルトゥング氏は、未来のビジョンから平和の手がかりを求め、未来から過去が見えることもあると提言している。平和は武力に頼らず、相手との忍耐強い対話ができるかどうかにかかっている。